

米国



1 農・畜産業の概況

米国経済における農業の位置付けは、他産業の発展に伴い低下傾向にあり、2019年のGDPに占める農業生産の割合は4.4%と前年と同水準となった。

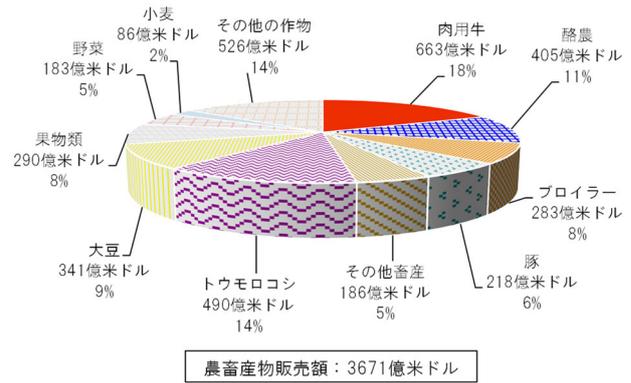
19年の農業経営体数(農畜産物の年間販売額1000米ドル以上)は、前年比0.3%減の202万3400戸、農用地面積は同0.2%減の8億9740万エーカー(3億6316万ヘクタール)となった。1経営体当たりの農用地面積は、同0.2%増の444エーカー(180ヘクタール)であった。なお、年間10万米ドル以上の農畜産物販売実績のある経営体は全体の18.5%で、全農用地面積の69.8%を占めた。

19年の農畜産物販売額(現金収入。自家消費分を除く)は、3671億米ドルと前年を1.1%下回った(図1)。

部門別に見ると、作物部門は同1.7%減の1916億米ドルとなった(図2)。このうち、生産量の約4割が家畜飼料に仕向けられるトウモロコシは、490億米ドル(作物部門に占める割合は25.6%)と最大を占めた。次いで、大豆が341億米ドル(同17.8%)、果物が290億米ドル(同15.1%)、野菜が183億米ドル(同9.5%)となった。

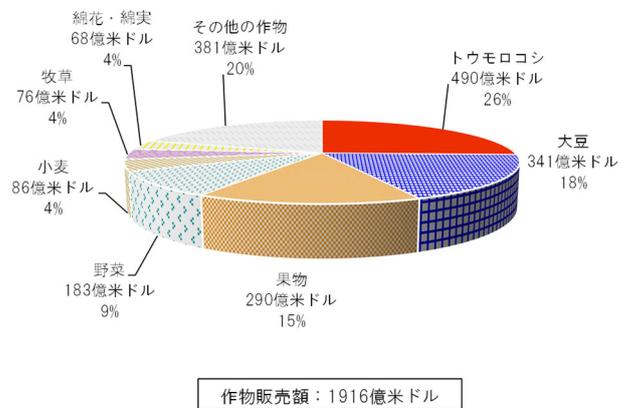
畜産部門は、同0.5%減の1754億米ドル(農畜産物販売額に占める割合は47.8%)となった(図3)。この内訳を見ると、肉用牛が663億米ドルと畜産部門の37.8%を占めた。次いで、酪農が405億米ドル(畜産部門に占める割合は23.1%)、ブロイラーが283億米ドル(同16.1%)、豚が218億米ドル(同12.4%)となった。

図1 農畜産物販売額(2019年)



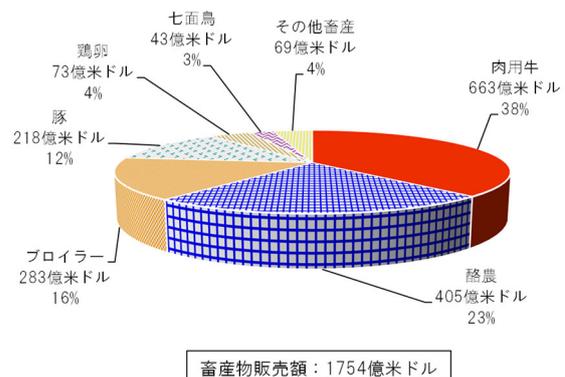
資料：USDA「Farm Income and Wealth Statistics」

図2 作物販売額(2019年)



資料：USDA「Farm Income and Wealth Statistics」

図3 畜産物販売額(2019年)



資料：USDA「Farm Income and Wealth Statistics」

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

米国は、年間1億トン近くの生乳を生産する世界最大級の酪農国である。しかし、国内に巨大な消費市場を抱えていることなどから、国際乳製品市場での米国の位置付けは、さほど高いものとはなっていない。

① 主要な政策

2018年農業法下での酪農の主な制度には、連邦生乳マーケティング・オーダー制度（FMMO）、酪農マージン保証プログラム（DMC）、牛乳寄贈プログラム（MDP）がある。

FMMOは、オーダー（生乳取引地域）内で取引される生乳について、飲用向け1分類と加工向け3分類の計4分類の用途に分け、それぞれの最低取引価格を設定するとともに、生乳取扱業者に対して、生産者へのプール乳価（用途別乳価を加算平均した乳価）支払いを義務付けている。これにより、生産者に対して安定的な収入の確保を可能とするとともに、消費者に対して合理的な価格で牛乳・乳製品を供給することを目的としている。2000年1月からは、①オーダー数の再編統合（当初の31地域が段階的に統合され、04年4月から10地域へ）②生乳の用途区分の再分類（3区分から現行の4区分へ）③最低取引価格の設定に当たり、従来の基礎公式価格（BFP）に代えて、多成分価格形成システムに基づく新基礎価格の導入—などの変更が加えられた。

DMCは、2018年農業法で、酪農マージン保護プログラム（MPP）に代わる生産者のセーフティネットとして創設された制度である。DMCはMPPと同様、補填の指標に飼料費を加味し、乳価と飼料費の差を生産者の収益（マージン）とし、掛け率に応じて補償することにより、再生産を確保することを目的としている。なお、DMCでは、補填の発動条件の緩和などセーフティネットとしての機能が改善されている。

また、MDPは、2018年農業法で乳製品寄贈プログラム（DPDP）の代わりとして創設された制度である。これは、生産者や加工業者などが低所得者層への食

料支援として牛乳を公共団体などに寄贈するものであり、発生した費用は政府から払い戻しを受けるという、DPDPをより簡易化した制度となっている。

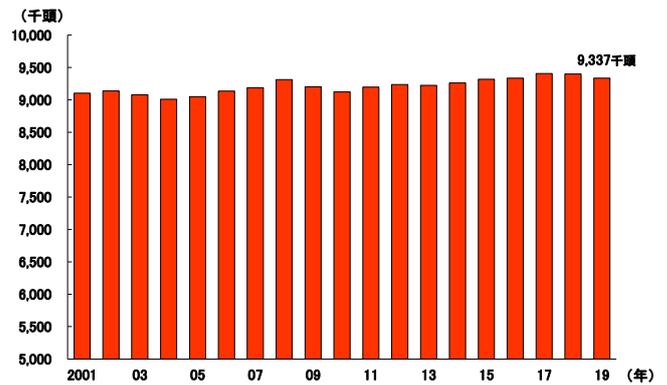
② 生乳の生産動向

ア 飼養頭数

搾乳牛飼養頭数は、1980年代中ごろから一貫して減少傾向で推移してきたが、99年に下げ止まった後は、小幅な増減を繰り返している。

2019年の搾乳牛飼養頭数は、前年比0.6%減の933万7000頭となった（図4）。

図4 乳用経産牛飼養頭数の推移



資料：USDA「Milk Production, Disposition, and Income」

イ 生産量

2019年の生乳生産量は、搾乳牛頭数が前年比0.6%減となったものの、1頭当たり乳量の増加により、9905万6000トン（前年比0.4%増）とわずかに増加し、10年連続で前年を上回った（表1）。

表1 生乳・乳製品の生産量の推移

(単位：千トン)

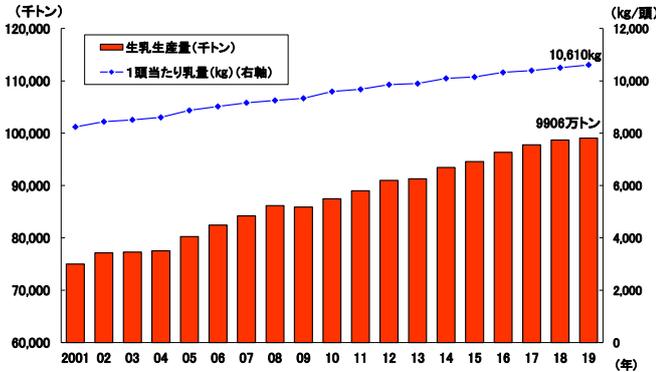
区分/年	2015	2016	2017	2018	2019
生乳	94,618	96,366	97,761	98,690	99,056
バター	843	834	838	893	905
脱脂粉乳	827	795	832	806	840
チーズ	5,370	5,525	5,733	5,914	5,959

資料：USDA「Milk Production」、「Dairy Products」
注：チーズはカッテージチーズを除く。

ウ 搾乳牛1頭当たり乳量

搾乳牛1頭当たり乳量は、遺伝的改良などにより増加傾向で推移しており、2019年は、1万610キログラム(前年比1.0%増)とわずかに増加した(図5)。

図5 生乳生産量と1頭当たり乳量の推移



資料:USDA「Milk Production, Disposition and Income」

エ 地域別生産動向

生乳生産量の5割強は上位5州(カリフォルニア、ウィスコンシン、ニューヨーク、アイダホ、テキサス)で占められており、上位10州(上位5州にミシガン、ペンシルベニア、ミネソタ、ニューメキシコ、ワシントンを加える)では、全体の約7割を占めている。

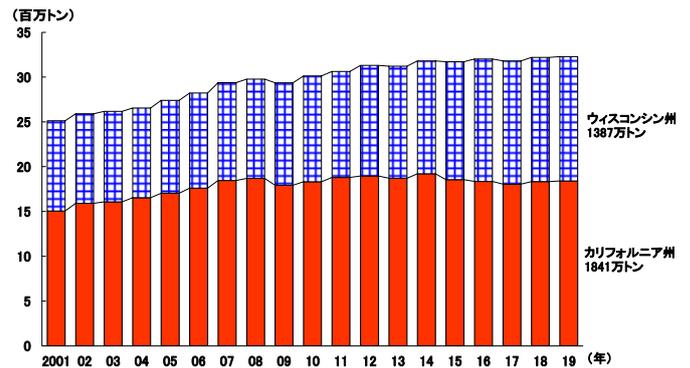
一部の州では、移民を主体とした安価な労働力による大規模化が進んでおり、その代表であるカリフォルニア州は、1993年にウィスコンシン州を抜いて国内最大の生乳生産州になって以降も増加基調で推移してきた。

カリフォルニア州については、2009年に、前年終盤の輸出価格の暴落を受けて1792万トン(前年比4.1%減)へ減少した(図6)。その後は増減を繰り返しながらも1800~1900万トン程度で推移しており、2019年は1841万3000トン(同0.5%増)となった。一方、生乳生産量第2位のウィスコンシン州は、2019年に1387万4000トン(同0.0%増)と前年並みとなった。



写真1 酪農家での乳牛飼養の様子

図6 カリフォルニア州およびウィスコンシン州の生乳生産量の推移



資料:USDA「Milk Production, Disposition and Income」

③ 牛乳・乳製品の需給動向

ア 生産動向

2019年のチーズの生産量(カッテージチーズを除く)は、前年比0.8%増の595万9000トンとなった(図7)。このうち、チェダーチーズを中心とするアメリカンタイプ^(注1)は、237万3000トン(同0.4%減)となり、モッツァレラチーズなどイタリアンタイプ^(注2)は、257万2000トン(同1.8%増)となった。イタリアンタイプは、宅配ピザやファストフードでの需要増により、過去20年以上に渡って増加基調で推移している。

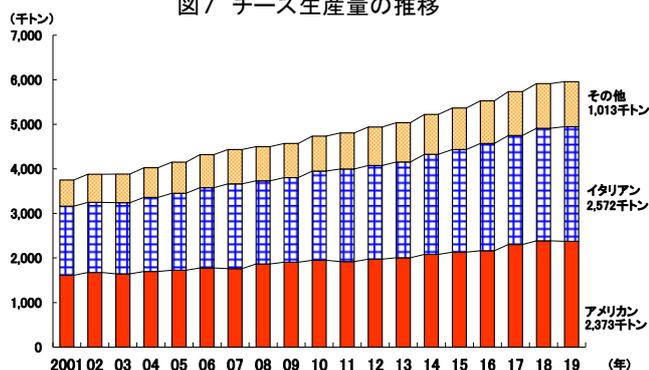
同年のチーズ生産量に占める割合は、アメリカンタイプが39.8%(同0.5ポイント減)、イタリアンタイプが43.2%(同0.4ポイント増)となった。

また、バター^(注3)の生産量は、90万5000トン(同1.3%増)となった一方、脱脂粉乳の生産量は84万トン(同4.1%増)となった。なお、バターおよび脱脂粉乳ともにカリフォルニア州が最大の生産州で、全米の30%、36%をそれぞれ生産している。

(注1) アメリカンタイプには、チェダー、コルビー、モントレジャックなどを含む。

(注2) イタリアンタイプには、モッツァレラ、パルメザン、プロヴォローネ、リコッタ、ロマーリオなどを含む。

図7 チーズ生産量の推移



資料：USDA「Dairy Products」

イ 消費動向

年間1人当たり飲用乳消費量(製品ベース、以下同じ)は、植物を原料とした飲料など多種多様な飲料との競合により、近年減少傾向で推移しており、2019年は64.0キログラム(前年比2.8%減)となった。なお、飲用乳については、乳脂肪が必ずしも体に悪影響を及ぼすものではないとの認識が広まっていることなどから、低脂肪牛乳や無脂肪牛乳など低脂肪タイプの消費量が減少する一方、以前は米国では少なかった全脂牛乳(いわゆる普通の牛乳)の消費が伸びている。

1人当たり年間チーズ消費量(カッテージチーズを除く)は、近年、増加傾向で推移しており、2019年は17.4キログラム(同0.9%増)となった。また、1人当たり年間バター消費量は、2.8キログラム(同2.0%増)となった。

④ 牛乳乳製品の価格動向

ア 生乳価格

2019年の生乳の生産者販売価格は、乳製品の卸売価格の上昇により、100ポンド当たり18.65米ドル(前年比14.4%高)とかなり大きく上昇した(表2)。

表2 生乳の生産者販売価格

(単位：米ドル/100ポンド)

区分/年	2015	2016	2017	2018	2019
生乳平均価格	17.10	16.30	17.70	16.30	18.65

資料：USDA「Agricultural Price」

イ 乳製品の卸売価格

2019年の乳製品の卸売価格は、米国内外の好調な需要により、おおむね堅調に推移した。バターは1ポンド当たり223.0セント(同0.9%安)、脱脂粉乳は同105.6セント(同31.3%高)、チェダーチーズは206.0セント(同12.2%高)となった(表3)。

表3 乳製品の卸売価格の推移

(単位：セント/ポンド)

区分/年	2015	2016	2017	2018	2019
バター	208.9	208.2	232.8	225.0	223.0
脱脂粉乳	90.9	83.4	85.6	80.5	105.6
チェダーチーズ	191.1	187.4	190.3	183.6	206.0

資料：USDA「Dairy Market News」

注1：バターはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格(グレードAA)。

注2：脱脂粉乳は西部のFOB価格。

注3：チーズはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格。

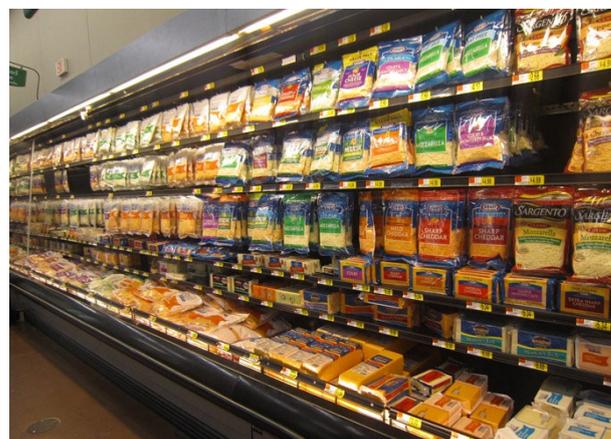


写真2 小売店でのチーズの陳列風景

(2) 肉牛・牛肉産業

米国は、世界の牛肉生産量の約2割を占める最大の牛肉生産国であると同時に、世界最大の牛肉輸入国でもある。また、肉用牛関係の農畜産物販売額に占める割合は最大となっており、米国農業の中で最も重要な部門の一つである。

肉用子牛生産は、家族経営による生産・管理が行われる一方、肉用牛の肥育に関しては、大規模なフィードロットで効率的な穀物肥育が行われている。また、肉牛の処理・流通面では、大手パッカーによる寡占化が顕著となっている。

① 肉牛の生産動向

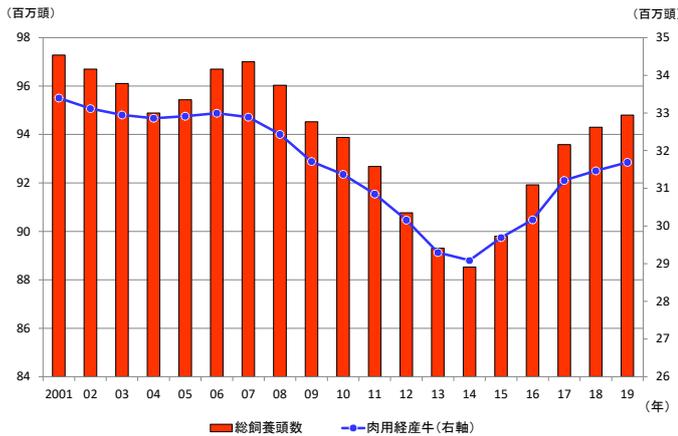
総飼養頭数は、2006年後半以降の飼料コスト高や11年以降の干ばつなどにより、肉用牛繁殖経営の収益性が悪化し、繁殖雌牛を中心に淘汰が進んだことから減少したが、14年を底に草地の状態が改善され、牛群再構築が進展したことにより増加に転じた（図8）。

19年もこの傾向は継続し、総飼養頭数は前年比0.5%増の9480万5000頭と、5年連続で増加した。

同年の飼養頭数の内訳を見ると、繁殖雌牛は同0.7%増の3169万1000頭となった一方、500ポンド（約227キログラム）以上の肉用繁殖後継牛（未経産牛）は、588万5000頭（同3.7%減）と減少した。

また、同年の子牛生産頭数（乳用種を含む）は、同0.7%減の3606万頭となった。

図8 牛飼養頭数の推移



資料：USDA「Cattle」
注：各年1月1日現在。



写真3 フィードロットの風景

② 牛肉の需給動向

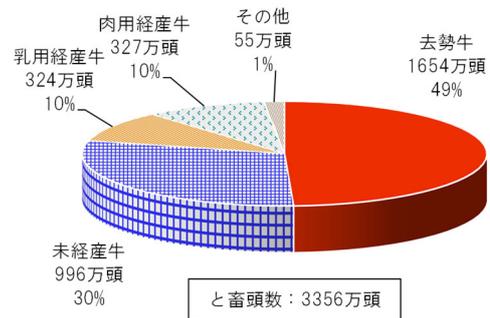
ア 生産動向

2019年の成牛と畜頭数は、前年比1.7%増の3355万5000頭となった（図9）。

種類別では、去勢牛は同2.1%減、未経産牛は同7.1%増、乳用経産牛は同2.2%増、肉用経産牛は同5.5%増となった。

このほか、同年の子牛と畜頭数は、同1.2%増の587万000頭となった。

図9 種類別成牛と畜頭数（2019年）



資料：USDA「Livestock Slaughter」

一方、19年の成牛のと畜時平均生体重量（連邦政府検査ベース）は前年比0.4%減の611.0キログラム、平均枝肉重量（連邦政府検査ベース）は同0.6%減の368.8キログラムとなった。

生体重量や平均枝肉重量は減ったものの、と畜頭数が増えたことから、同年の牛肉生産量（枝肉重量ベース）は、同1.1%増の1231万7000トンとなった（表4）。

表4 牛肉需給（枝肉換算）の推移

（単位：千トン）

区分/年	2015	2016	2017	2018	2019
生産量	10,749	11,440	11,878	12,189	12,317
輸入量	1,529	1,366	1,358	1,360	1,387
輸出量	1,028	1,160	1,297	1,433	1,373
在庫量	310	343	294	300	291
消費量	11,236	11,643	12,017	12,140	12,372
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	24.5	25.2	25.9	26.0	26.4

資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

米国は、国内でトリミング（部分肉の成形過程で発生する脂肪分の多い肉）が大量に発生するため、赤身割合の高い牛肉を輸入（主に豪州）してひき肉を生産している。また、北部ではテーブルミートをカナダから輸入している。

2019年の牛肉輸入量（枝肉重量ベース）は、前年比2.0%増の138万7000トンとなった。

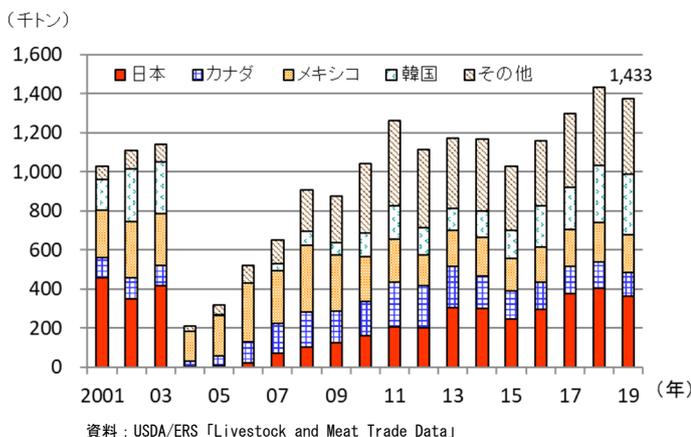
国別に見ると、カナダ産は7年連続の増加となる38万5000トン（同7.1%増）、豪州産は4年ぶりの増加となる32万5000トン（同6.5%増）、ニュージーランド産は、同国の中国向け輸出が大幅に増加した一方、米国向けが大幅に減少し、18万2000トン（同30.0%減）となった。

牛肉輸出量は、03年12月に米国内で初めてBSEが発生した影響を受け、04年に大幅に減少したが05年以降は回復・増加基調となった（図10）。

16年以降は輸出先の好調な牛肉需要などを背景に増加傾向で推移した。19年は、主要輸出国との競争激化などにより、同4.2%減の137万3000トンと4年ぶりに減少した。

国別に見ると、最大の輸出先である日本向けが36万3000トン（同9.7%減）と4年ぶりに減少し、韓国向けが6年連続の増加となる31万トン（同7.2%増）、メキシコ向けが4年ぶりの減少となる19万3000トン（同5.4%減）と、輸出先上位4カ国は韓国向けを除き減少した。

図10 牛肉の輸出量と相手国の推移



ウ 消費動向

2019年の1人当たり年間牛肉消費量（小売重量ベース）は、前年比1.4%増の26.4キログラムとなり、4年連続で増加している。

③ 肉牛・牛肉の価格動向

ア 肥育もと牛価格

肥育もと牛価格（オクラホマシティー、600～650ポンド）は、2014、15年が高値で推移していたものの、16年は、牛群再構築に伴う保留傾向が維持され、飼養頭数が増加したことなどから、前年比32.3%安と大幅に下回った（表5）。16年以降100ポンド当たり150米ドル台で推移しており、19年は同3.5%安の同153.7米ドルとなった。

イ 肥育牛価格

肥育牛価格（オマハ、1100～1300ポンド、去勢牛、チョイス級^(注3)）は、2014、15年が高値となったものの、16年に下落して以降おおむね横ばいで推移し、19年は同0.1%高の100ポンド当たり117.1米ドルとなった。

（注3）全8段階の肉質等級のうち、上から2番目の等級。

ウ 牛肉卸売価格

2019年の卸売価格（チョイス級、600～900ポンド、カットアウトバリュー）は、国内外の需要の高まりなどにより前年比4.1%高の100ポンド当たり222.9米ドルとなった。

エ 牛肉小売価格

2019年の平均牛肉小売価格（チョイス級）は、前年並みの1ポンド当たり592.6セントとなった。

表5 生体牛と牛肉の価格の推移

(単位：米ドル/100ポンド)

区分/年	2015	2016	2017	2018	2019
肥育もと牛	226.5	153.4	155.8	159.2	153.7
肥育牛	148.6	120.9	121.9	117.1	117.1
牛肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	237.5	206.7	209.7	214.1	222.9
牛肉小売価格 (セント/ポンド)	628.9	596.4	590.9	592.3	592.6

資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook: Table」
注：カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

(3) 養豚・豚肉産業

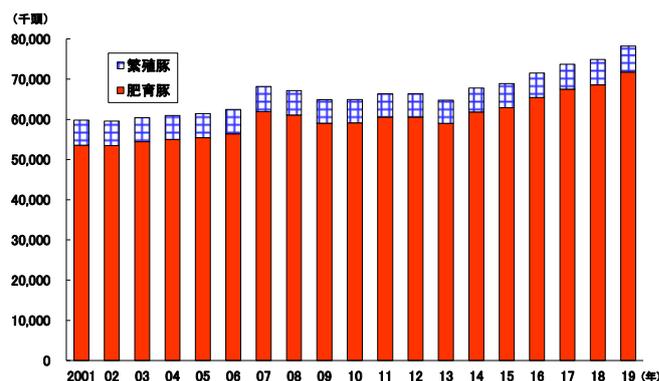
米国の養豚は、アイオワ州やイリノイ州を中心とするコーンベルト地帯で、伝統的に穀物生産の副業として営まれてきた。一方、ノースカロライナ州やオクラホマ州でのインテグレーションの出現は、養豚産業に対して、生産・流通などの面で大きな変化をもたらした。また、各州で環境規制を強化する動きが見られることから、大規模経営体による環境問題も顕在化している。

① 肉豚の生産動向

豚飼養頭数は、2010年以降はおおむね増加傾向で推移したものの、13年は豚流行性下痢(PED)の発生により落ち込んだ(図11)。しかし、14年以降再び増加に転じ、19年は前年比4.2%増の7822万8000頭と6年連続で増加し、過去最高を記録した。

飼養頭数の内訳を見ると、繁殖豚は647万1000頭(同2.3%増)、肥育豚は7175万7000頭(同4.4%増)とそれぞれ増加した。

図11 繁殖豚頭数と肥育豚頭数の推移



資料：USDA「Quarterly Hogs and Pigs」
注：各年12月1日現在。

19年(18年12月~19年11月)の子豚生産頭数は、良好な収益性により繁殖母豚が増加したことに加え、一腹当たり産子数が10.98頭(同2.8%増)となったことから、1億3944万9000頭(同5.2%増)となった。



写真4 肉豚の飼養風景

② 豚肉の需給動向

ア 生産動向

2019年のと畜頭数(コマーシャルベース)は、飼養頭数の増加に伴い、1億2991万3000頭(前年比4.4%増)となり、豚肉生産量は1253万6000トン(同5.0%増)と過去最高を記録した(表6)。

また、19年のと畜時平均生体重量(連邦政府検査ベース)は129.4キログラム(同0.7%増)、平均枝肉重量(連邦政府検査ベース)は96.6キログラム(同0.5%増)となった。

表6 豚肉需給（枝肉換算）の推移

(単位:千トン)

区分/年	2015	2016	2017	2018	2019
生産量	11,114	11,313	11,605	11,936	12,536
輸入量	506	495	506	473	429
輸出量	2,272	2,376	2,555	2,666	2,867
在庫量	267	230	251	254	293
消費量	9,340	9,476	9,541	9,748	10,065
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	22.6	22.8	22.8	23.1	23.8

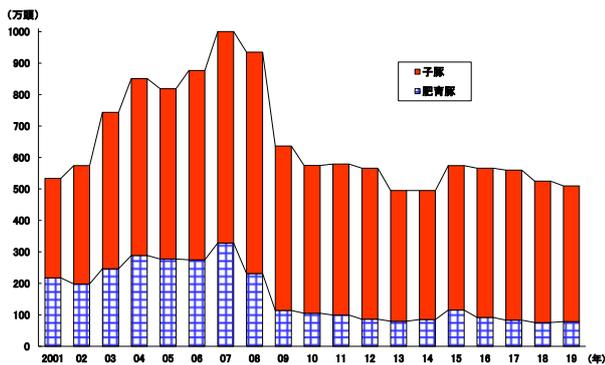
資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

2019年の豚肉の輸入量（枝肉重量ベース）は、豚肉生産量の増加などにより、42万9000トン（前年比9.3%減）となった。国別に見ると、最大の輸入先であるカナダが26万1000トン（同6.4%減（総輸入量に占める割合は61.0%））、次いで多いポーランドは6万1000トン（同19.4%減（同14.2%））とともに減少した。

また、同年の生体豚の輸入は主に子豚であり、そのほぼ100%がカナダからである。同国からの輸入頭数は、米国内の豚飼養頭数の増加により、510万頭（前年比2.9%減）となった（図12）。

図12 カナダからの生体豚輸入頭数の推移



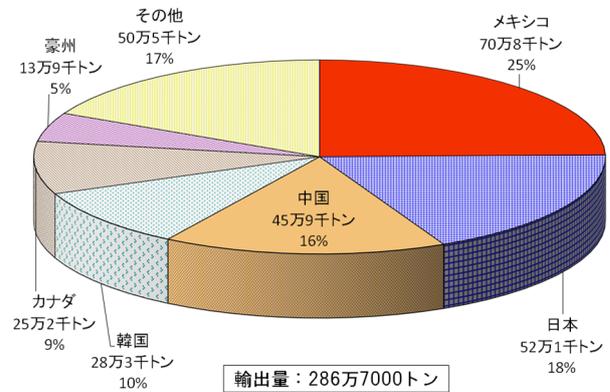
資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

輸出量（枝肉重量ベース）は、2013年にPEDによる減産で減少し、14年には増加に転じたが、15年には、主要通貨に対して米ドル高で推移したことから再び減少した。16年以降、生産量の増加や輸

出先での好調な需要を背景に、再び増加に転じ、19年は前年比7.6%増の286万7000トンとなった（図13）。

国・地域別に見ると、首位のメキシコ向けは70万8000トン（同11.7%減）、日本向けは52万1000トン（同5.7%減）、アフリカ豚熱の流行で豚肉不足となった中国向けは45万9000トン（同3倍）と急増した。韓国向けは28万3000トン（同14.0%減）、カナダ向けは25万2000トン（同4.7%増）、豪州向けは13万9000トン（同32.8%増）となった。

図13 豚肉の輸出相手国（2019年）



資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2019年の1人当たり年間豚肉消費量（小売重量ベース）は、23.8キログラム（前年比2.8%増）となった。15年以降、牛肉価格が高値で推移したことによる代替需要などにより、消費が増加している。

③ 肥育豚・豚肉の価格動向

ア 肥育豚価格

肥育豚価格は、2014年には、PEDの影響による生産量の減少などにより大きく上昇したが、15年以降、アップダウンを繰り返している。19年は前年比4.4%高の100ポンド当たり48.0米ドルとなった（表7）。

表7 肥育豚と豚肉の価格の推移

(単位:米ドル/100ポンド)

区分/年	2015	2016	2017	2018	2019
肥育豚	50.2	46.1	50.5	45.9	48.0
豚肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	79.0	78.4	84.0	76.1	77.1
豚肉小売価格 (セント/ポンド)	385.3	374.7	378.4	374.5	384.3

資料: USDA 「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook : Table」
 注1: 肥育豚価格は、全米の平均価格。
 注2: カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 豚肉価格

2019年の豚肉卸売価格(カットアウトバリュー)は、供給量が多かったものの、需要も好調であったことから、100ポンド当たり77.1米ドル(前年比1.4%高)と前年を上回った。

また、平均豚肉小売価格も1ポンド当たり384.3セント(同2.6%高)と前年を上回った。

(4) 養鶏・鶏肉産業

米国の養鶏産業は、飼料穀物の一大生産国という利点を生かし、生産から流通までの一貫したインテグレーションの進展により、極めて効率的な生産が行われている。また、国内では、消費者の健康志向からむね肉を中心として消費を大きく伸ばすと同時に、不需要部位のもも肉を中心に、鶏肉生産量の約2割を輸出している。

① ブロイラーのふ化羽数の動向

2019年のブロイラーふ化羽数は、好調な鶏肉需要などを背景に増羽意欲が高いことから、前年比2.2%増の99億1922万1000羽となった。

② 鶏肉の需給動向

ア 生産動向

2019年のブロイラー生産量(可食処理ベース)は、処理羽数、1羽当たりの生体重量ともに増加したことから、前年比3.1%増の1991万5000トンとなった(表8)。1羽当たり平均重量(生体ベース)は、骨なしむね肉の需要増に伴うブロイラーの大型化などを背景に近年増加傾向にあり、19年は2.87キログラム

(同1.0%増)となった。

表8 ブロイラー需給(可食処理ベース)の推移

(単位:千トン)

区分/年	2015	2016	2017	2018	2019
生産量	18,166	18,459	18,898	19,323	19,915
輸入量	59	59	57	63	59
輸出量	2,867	3,014	3,078	3,206	3,222
在庫量	378	353	388	383	425
消費量	15,094	15,332	15,639	15,978	16,498
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	40.4	40.8	41.3	42.0	43.1

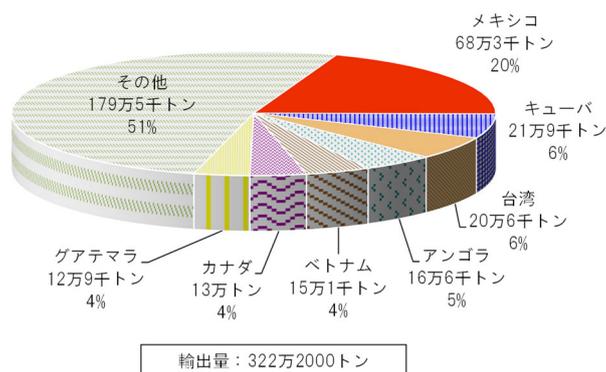
資料: USDA 「Livestock, Dairy and Poultry Outlook : Table」
 注: 1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出動向

2019年のブロイラーの輸出量(可食処理ベース)は、輸出先での好調な鶏肉需要を背景に、前年比0.5%増の322万2000トンとなった。ただし、2015年の鳥インフルエンザ流行に伴う輸出先の禁輸措置から回復傾向にはあるものの、14年比では2.7%の減少となっている。

主要国・地域別に見ると、メキシコ向けは前年比4.9%増、キューバ向けは同12.4%増、台湾向けは同3.5%増、アンゴラ向けは同20.6%減、ベトナム向けは同48.9%増となった(図14)。

図14 ブロイラーの輸出相手国(2019年)



資料: USDA 「Livestock, Dairy, and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2019年の1人当たり年間鶏肉消費量(小売重量ベース)は、前年比2.8%増の43.1キログラムとなった。

③ ブロイラーの価格動向

ア ブロイラーの生産者販売価格

2019年のブロイラーの生産者販売価格は、卸売価格が前年を下回ったことなどから、前年比15.3%安の1ポンド当たり48.2セントとなった(表9)。

イ 鶏肉価格

(ア) 卸売価格

2019年のブロイラーの丸どり卸売価格(中抜き、12都市平均)は、前年比9.4%安の1ポンド当たり88.6セントとなった。なお、国内向けが主体となっているむね肉が同105.7セント(同3.6%安)、輸出向けが主体のもも肉は同58.8セント(同27.2%高)となった。

(イ) 小売価格

ブロイラーの丸どり小売価格(中抜き)は、前年比0.1%安の1ポンド当たり149.5セントとなった。

表9 ブロイラー価格の推移

(単位:セント/ポンド)

区分/年	2015	2016	2017	2018	2019
生産者販売価格(生体)	52.9	48.6	54.6	56.9	48.2
卸売価格(丸どり)	90.5	84.3	93.6	97.8	88.6
丸どり小売価格	148.8	146.4	147.2	149.7	149.5

資料: USDA 「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook: Table」
注: 卸売価格、丸どり(中抜き)の価格。

(5) 飼料穀物

米国は、世界最大の飼料穀物の生産・輸出国である。飼料穀物の主力であるトウモロコシは、世界の生産量および貿易量の4割程度を占めていることから、世界の需給動向に与える影響力は極めて大きい。

① 穀物の生産動向

2019/20年度(9月~翌8月)のトウモロコシ(サイレーズ用を除く)の生産量は、収穫面積は増加したものの、単収が減少したことにより、136億2000万ブッシェル(3億4600万トン^(注4))
(前年度比5.0%減)と前年度をやや下回った(表

10)。同年度の期末在庫は、前年度をかなり大きく下回る19億1900万ブッシェル(4900万トン)となった。

(注4) 1ブッシェルを25.4キログラムとして換算。

表10 トウモロコシ需給の推移

(単位:百万トン)

区分/年度	15/16	16/17	17/18	18/19	19/20
生産量	345	385	371	364	346
国内消費量	299	314	314	310	310
うち飼料向け	130	139	135	138	150
輸出量	48	58	62	53	45
期末在庫量	44	58	54	56	49

資料: USDA 「Feed Grain Database: Yearbook Tables」



写真5 トウモロコシの収穫風景

② 穀物の輸出動向

2019/20年度のトウモロコシの輸出量は、17億7700万ブッシェル(4500万トン)(前年度比14.1%減)とかなり大きく減少した。このうち、最大の輸出先であるメキシコ向けは1449万トン(同10.2%減)となり、7年ぶりに減少した。メキシコに次ぐ輸出先である日本向けは、1003万トン(同24.5%減)と前年を大幅に下回った。一方、国内相場が高水準となった中国向けは、割合は小さいながらも209万トン(同8倍)と大幅に増加した。

③ 穀物の価格動向

2019/20年度のトウモロコシの生産者販売価格は、1ブッシェル当たり3.56米ドル(前年度比1.4%安)となった(表11)。

表11 トウモロコシ価格の推移

(単位:米ドル/ブッシェル)

区分/年度	15/16	16/17	17/18	18/19	19/20
生産者販売価格	3.61	3.36	3.36	3.61	3.56

資料: USDA 「Feed Grain Database: Yearbook Tables」